

世界遺産タウポ湖を守る、サステイナブルな牧草牛

TAUPO BEEF

タウポビーフ



安心、安全で健康にもいい！赤身のおいしい牧草牛

タウポビーフ 7つの特徴

1 完全な牧草飼育

1頭当たり1haの飼育面積を確保することで365日好きなだけ牧草を食べることが可能で、ストレスなく育つことが出来ます。そうすることで赤身でも柔らかく、おいしい牛肉になります。

2 高い安全性

成長ホルモン剤、抗生物質、遺伝子組み換え飼料は生涯不使用です。また飼料となる牧草への成長促進のための科学肥料も使用していません。とつてもナチュラルで安全性の高いビーフなのです。

3 環境保全

1頭当たり1haの頭数制限を設けることにより、タウポ湖の水質汚染の原因となる藻の栄養となる牛の糞尿を適切な量に保っています。タウポビーフは世界遺産タウポ湖の水質を守っています。

4 SDGsに則した生産方法

穀物飼育は生産・輸送による大量のCO2排出が上げられます。タウポビーフは100%牧草を飼料にすることにより、飼料供給によるCO2排出がありません。地球にやさしい、持続可能な方法で※カーボンニュートラルを実現する取り組みをしています。

5 豊富な鉄分

牧草牛は一般的な穀物肥育牛に比べ、3倍もの鉄が含まれています。日本人の多くは鉄不足と言われています。タウポビーフのような牧草牛は吸収の良い「ヘム鉄」が豊富に含まれています。

6 高タンパク・低脂肪

牧草牛は脂肪分が少なく、赤身が多いです。国産穀物牛と比較した研究では、カロリーは約62%、脂質は約40%違うという結果も。(ヒレ肉での比較)

7 身体に良いアブラ“オメガ3脂肪酸”

オメガ3脂肪酸は血液を固まりにくくしたり、血流を良くしてくれると言われています。また、脳の神経細胞の材料としても使われており、動脈硬化や認知症の予防に有効だという研究結果もあります。さらに白血球に指令を出すオメガ6脂肪酸が過剰な攻撃指令を出す動脈硬化、心筋梗塞、脳梗塞などの原因になると考えられていますが、その攻撃指令にブレーキを掛けるのもオメガ3脂肪酸の役割。このオメガ6、オメガ3はともに身体に必要なアブラですがそのバランスがとても重要で牧草牛であるタウポビーフは理想とされる※“2：1”の割合であるということが明らかになっています。まさに身体に良いアブラなのです。

※日本脂質栄養学会が推奨している数値。



タウポビーフは環境にも身体にもいいんだよ
by マイクさん(タウポ農家)



タウポビーフは世界遺産タウポ湖の水質改善にも貢献しています。

Why is the TAUPO BEEF so delicious?

-美味しさの秘密-

タウポビーフは自然環境を守るとともに、牛自体にストレスが掛からないように細心の注意を払っています。

牧草牛は穀物を食べないので、脂が入りづらいです。

そのため、お肉を柔らかくするにはいかにストレスをかけないかが大事になってきます。

タウポビーフは牛1頭に対し、1.2haの飼育面積を取ります。(平均の約3~4倍)

そして牛達が365日好きなだけ牧草を食べられる環境を整えることにより、柔らかくて美味しいお肉になっていきます。

What is the characteristic of the TAUPO BEEF?

-タウポビーフの特徴-

- 牧草飼育(365日)(コンテニューフィーディング)(サプリメント、パームかすの使用無し)
- 抗生物質使用無し(生涯を通して)
- 成長ホルモン無し(生涯を通して)
- アンガス種×シャロレー種の交配
- タウポ湖の水質を保護するために、新しい環境規制の元で運営されている農家から飼育
- 指定されたタウポ湖周辺の地域にて飼育
- 牛1頭に対して約1.2haの飼育面積(平均の3~4倍)
- 飼育期間 平均約18ヵ月



What is the characteristic feed of the TAUPO BEEF?

-飼料について-

- タウポで生産された牧草のみを使用
- 一般的なグラスフェッドビーフ(は、冬場は牧草が少なくなるため一時的に穀物を与えたり、必要最低限の牧草しか与えないが、タウポビーフは1頭当たりの飼育面積が十分にあるため冬場も十分なタウポで生産されたサイレージにて飼育。年間を通して充分な量の牧草で飼育される。
- 冬場はケールなどの栄養価の高い飼料を与えるなどして、体調を管理する。
- 栄養価の高い牧草を与えられるように、牧草の長さを適切にカットして(牧草牛)管理。
- 常に環境保全を考えた牧草管理。

Pasture management

-牧草管理-

左は牛を放牧する前の牧草です。
牧草は夏の間、刈らずに伸びます。
それにより強い陽射しから下部の牧草を守ることが可能になります。



右は刈り取り後の牧草です。
牛を放つ数日前に右のように牧草をカットします。
成長した部分をカットすることによって、陽射しから守られていた、より栄養価が高く、おいしい牧草を牛が食べられることとなります。